

教育目標		よい子 強い子 伊丹の子 一徳・知・体の調和のとれた心豊かなたくましい子の育成 未来につながる きずなの学校						
重点目標		①人間性の涵養につながる教育推進 ②全ての子どもの可能性を引き出す授業改善の推進 ③身体的・精神的な健康の保障と健全な食生活の推進 ④教育環境の整備、業務改善と学校安全の充実 ⑤地域とともにある学校づくりの推進						
主要施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	【確かな学力】の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない教育 ③学校・家庭・地域社会総がかりの教育	①研究テーマを「伝え広げ深め合う協働的に学ぶ子どもたちの育成」とし、「対話を生み出す3つの手立ての探究」「児童の学びを見極め、授業に生かす実践を通して」「学びがいのある授業づくり」の3つから研究テーマに迫る。今年度は特に、子どもが主体的に成長を感じられるような単元構想に力を入れる。 ②読み書き、計算などの基礎的な学力を児童に定着させる教育活動に取り入れた単元づくりを進める。	①多様な意見を認め合える集団づくりを形成する。 ②ペア、少人数のグループにおける対話的活動を通して、深め合える集団づくりを図る。 ③校内授業を全学年行うことで授業改善を図る。 ④伊小タイムで「書く活動」「音読計算」「音読」などを取り組み、習熟を図る。 ⑤週1回学年打ち合わせで学習の習熟状況を確認する。そして、定例部会で報告し、学校全体で共有する。 ⑥地域の施設や店と連携した生活科や総合的な学習の時間に取り組む。	①児童アンケート3「授業はわかりやすい」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ②児童アンケート4「授業で友だちの考えを聞くことは勉強になる」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ③児童アンケート5「先生たちは、教え方を工夫している」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ④教職員アンケート3「学校は「学力向上」のための取り組みをしている」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ⑤保護者アンケート2「子どもは学校の学習に積極的に取り組んでいる」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ⑥保護者アンケート9「子どもは、学校での学びが身につけている」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ⑦各学年で地域や地域と連携した学習を1単元以上計画・実施する。	B	①児童アンケート3、4、5において肯定的な回答が90%程度であった。 ①教職員アンケート3において肯定的な回答が100%であった。 ①②保護者アンケート2において肯定的な回答が87.8%であった。 ②保護者アンケート9において肯定的な回答が91.6%であった。 ③他学年や地域とつながる学習活動を設定することができた。	①週1回学年打ち合わせで学習の習熟状況を確認する。定着に復習の時間が必要ならば、復習課題を各学年で用意し、習熟を図る。 ②地域教材・人材を積極的に取り入れ、カリキュラム・マネジメントを推進していく。 ③これまでの取組が基礎学力の定着に結びついていると感じる。細やかな確認はとて大事だと感じる。今後も継続した取組を。 ④地域と連携した学習は続けていきたい。	①自己評価はBであるがアンケート結果や取組内容からは、十分に評価できる。 ・今年度は委員と職員で学力テストの分析を行ったが、共に学力や目指す子ども像を話し合えたことは大変よかった。 ・これまでの取組が基礎学力の定着に結びついていると感じる。細やかな確認はとて大事だと感じる。今後も継続した取組を。 ・地域と連携した学習は続けていきたい。
	新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①端末を活用し、適切に情報収集したり、工夫してアウトプットしたりできるよう指導する。 ②間違いを恐れず英語での会話を積極的に取り組むことができる環境を作る。 ③端末を活用し、児童が学習を効率よく進めたり学習内容を深めたりできるように、環境を整える。	①情報を取捨選択し、自分の言葉を用いて表現できるような指導計画の作成を促す。 ②定期的なペア活動やグループ活動、スピーチを取り入れ、主体的に外国語で発話する態度を育てる。 ③教師や児童が滞りなく端末活用ができるよう、端末の保守点検を迅速に行ったり、不具合の対応法を職員に周知したりする。	①高学年児童アンケート「タブレットを使った調べ学習では、必要な情報を選び、わかりやすいまとめ方」としている質問に肯定的な回答が80%をこえる。 ②言語活動を毎時間1回は行い、主体的に外国語を用いてコミュニケーションをとれるよう活発な技能を身につける。 ③職員アンケート2「端末や通信の不具合において、いくつかの対応策が思い浮かぶ」の肯定的割合が90%をこえる。	①同左アンケートでは、肯定的な回答の割合が87%、「(全く)当てはまらない」の人数が7人であった。 ②間違っても挑戦する児童が増加したが、積極的にない児童は変わらずであった。学習状況調査「英語の勉強は好き」が75.2%で県・国より有意に高かった。 ③同左アンケートでは、肯定的な回答の割合が62%、「(全く)当てはまらない」の人数は8人と、目標としていた数字に届かなかった。	B	①来年度に向け、情報活用能力における「必要な情報を選ぶ」と「わかりやすくまとめる」ことの具体を、研修や情報提供によって周知する。 ②必然的に英語を話さなければいけない状況を増やす。また目的や場面設定を明確にし、話したくなるような授業内容、環境づくりをする。 ③個人で解決できたかどうか拘らず、不具合の事例を定期的に収集し、FAQを充実させていく。	①自己評価はBだが、アンケート結果や取組の成果から、A評価といえる。 ・中学生のタブレット端末操作や活用力を見る、小学校で十分に活用してきたことが分かる。資料をまとめたり、考えをまとめたりする学習活動に今後も取り組んでいきたい。 ・不具合に対応できない職員については、Q&Aや、マニュアルを作り、組織としてフォローできるようにしていきたい。 ・英語・ICT教育の定期的な職員研修も必要である。
	【豊かな心】の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①学校教育活動全体を通して、豊かな感性や確かな判断力を養い、子どもたちが、豊かな人間性、自ら学び、考える力を育むために実際に自然や社会に触れる機会を設定する。生き方を求めて主体的に行動できる子どもを育てる。 ②問題行動やいじめの未然防止、早期発見を図り、児童が楽しく過ごせる環境をつくる。 ③不登校の早期発見、対応に努め、児童が安心して通えるように支援する。 ④子どもたちが豊かな人間性、自ら学び、考える力を育むために実際に自然や社会に触れる機会を設定する。	①他の道徳的教育活動との関連を固めながら、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養い、道徳的価値を自覚し、自己の生き方についての考えを深め、主体的に行動しようとする態度を育てる。 ②③学年、生活指導部会、管理職間の円滑な連絡体制の確立、校内職員の共通理解を徹底し、チームで課題解決にあたる。 ④3年で環境体験学習、5年で自然学校を実施する。また、その他においても体験を意識してカリキュラムを作成する。	①児童アンケート14「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ②教職員アンケート4「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っている」の項目で肯定的な回答が90%をこえる。 ③保護者のアンケート10「学校は子どもは生活のルールやマナーを守っているか」の項目で肯定的な回答が90%をこえる。 ④3年3回いじめアンケートを実施し、その都度いじめ対策委員会を開き、全職員で対応にあたる。 ⑤毎月、長期欠席児童の動向を共有し、組織的な対応を検討する。 ⑥環境体験学習、自然学校および、それに準ずる体験を実施する。プログラムを考える際には、自然や地域との関わりや集団(グループ)を取り入れる。	①児童アンケート「自分を大切にすることや、他人への思いやりについて」の質問に肯定的な回答が88.1%であった。 ②教職員アンケートでは、「問題行動が起きた時、組織的に対応できる体制が整っているか」の質問に肯定的な回答が100%であった。 ③保護者のアンケートは、「子どもは生活のルールやマナーを守っているか」の質問に肯定的な回答は91%であったが、「先生は子どもの様子をよく見て、適切な指導を行っているか」の質問に対しては83%であった。(90%越えを目標) ④3年3回いじめアンケートを実施し、いじめ対策委員会では対応方法や重大事案であるかどうか、虐待事案について検討した。 ⑤不登校傾向の児童の居場所としてスマイル教室の認知が進んだ。来年度以降にシステムや児童の特性などをどのように引き継いでいくかが課題である。 ⑥環境体験学習、自然学校ともに目的を持って計画・実施することができた。特に、自然学校でのひょうご冒険教育では児童が変わっていく姿が見られた。	B	①児童が自己肯定感を高めることができるように、道徳だけでなく学校生活において児童が周囲の人々と関わりながら、主体的に活動できる取り組みを計画・実施していく。 ②全職員での情報共有の仕方、管理職と生活指導担当との連携など、今年度うまいことに対しては引き続き取り組んでいく。 ③3年級経営の研修を行うとともに保護者との情報共有を密に行う。 ④スマイル教室での取り組みや児童の特性を全職員で共通理解し、児童に関わっていかねばならない。来年度、編成や体制が変化しても年度当初の関係作りは丁寧に行っていく。 ⑤来年度以降も引き続き、本校児童の様子と趣旨を照らし合わせながら環境体験学習、自然学校の場所やプログラムを検討していく。	①自己評価はBであるが、十分評価できる。いじめや不登校については、学校の大きな課題ではあるが、スマイル教室やまなびルーム、いじよの部屋など、学校は十分に取り組んでいると言える。 ・保護者や社会の考え方が変わってきている。学校だけでは解決は難しい。今後も保護者や関係機関と連携し組織として取り組んでいきたい。
	【健やかな体】の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②発達段階に応じた健全な食育の推進	①運動に親しみ、楽しく取り組む態度を育てる。 ①学校行事や休み時間、教育活動全体を通して、体力・運動能力の向上を図る。 ①心や体の健康に関心をもち、健全な生活を営む態度を育てる。 ①低学年「だれとでもよく、楽しく運動できる子ども」 ①中・高学年「課題をもち、工夫して運動を楽しめる子ども、心の健康や病気の予防について理解できる子ども」 ①備品の充実、教具の整理をはかる。 ①全職員が体育の授業を充実して行えるように、自主研修を活用して、指導力向上を図る。 ①学校HP等を活用し、家庭でもできる運動について知らせる。 ②給食時間や学級活動、高学年の家庭科の授業を活用して食事マナーや栄養の理解を図る。	①固定時間に応じた単元指導計画を立て、授業の充実をはかる。(1年102時間 週3時間、2～4年105時間 週3時間、5・6年90時間 週2.6時間) ①研修・研究の機会があれば紹介すると共に、できるだけ参加する。 ①学年で作成したワークシート類をデータで保存し、活用する。 ①全職員が体育の授業を充実して行えるように、自主研修を活用して、指導力向上を図る。 ①学校HP等を活用し、家庭でもできる運動について知らせる。 ②給食時間や学級活動、高学年の家庭科の授業を活用して食事マナーや栄養の理解を図る。	①「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が90%をこえる。 ①「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「体育の授業は楽しい」の肯定的回答が90%をこえる。 ①児童アンケート7「体を動かすことが楽しい」の肯定的回答が90%をこえる。高学年の肯定的な回答をまずは80%をこえる。 ①保護者アンケート4「子どもは、運動に親しんでいる」の肯定的回答が90%をこえる。 ②児童アンケート・保護者アンケート「早寝・早起き・朝ごはん」の項目で肯定的な回答が75%をこえる。 ③教職員アンケート6「食事マナーや栄養の指導」の項目で肯定的な回答が90%をこえる	○「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が90%を上回った。 △「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「運動やスポーツをすることが好き」の肯定的回答が女子は82%にとどまった。【90%越えを目標】 ○「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、「体育の授業は楽しい」の肯定的回答が男子は90%をこえる。(男子94%女子85%) △女子は90%を切った。 △学校評価で「体を動かすことが好き」の項目に肯定的な回答した児童が88%だった。(昨年度同様) ○4年生の「よくあてはまる」が【70%】を超えた。 △高学年(5-6年)になると「よくあてはまる」が【70%】切り、(5.6年)の「あてはまらない」が【7.5%、7.2%】になっている。【肯定を80%越えを目標】【当てはまらないを3%未満を目標】 △保護者アンケートにて「子どもは運動に親しんでいる」の肯定的回答は72%だった。【90%越えを目標】 ②保護者・児童アンケート「早寝・早起き・朝ごはんを心掛けて生活している」の項目で肯定的な回答が72.45%だった。前年度より2%アップした。 ③教職員アンケート6「食事マナーや栄養の指導」の項目で肯定的な意見が96%であった。	B	①全職員が体育の授業を充実して行えるように、自主研修などを積極的に活用し、指導力向上を図る。 ・学校評価でも読み取るように(1-4年)は運動が好きなので、継続して楽しめるように授業の考え方も見直していく。 ・プレイタイムに外で遊ぶ高学年児童を増やせるように取り組みを考える。 ・家で取り組みたくなる運動課題などを例示し、子どもたちが進んで取り組める場や環境を設定する。 ②食育については、栄養教諭とも連携し、引き続き、保護者に情報を発信していきながら具体的に推進していく必要がある。②給食委員会で食育に力を入れた活動を引き続き行っていく。	①今年度、生活リズムチェックに取り組んだり、睡眠について研修をされたのはよかったです。 ・生活リズムについては、低学年からの保護者啓発や取組が必要。就学前施設と連携して取り組んでいきたい。 ・運動については、委員会活動等で工夫されているのは大変よい。また、家庭での取組も考えられていてよい。今後も続けていきたい。 ・からだづくりとして、姿勢の大切さを児童にも知らせていきたい。
教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	①夢や目標をもち、主体的な学びや活動ができる児童を育成する。 ②児童の心理的、福祉的な支援のために、管理職や特別支援教育Co.、生徒指導担当が窓口となり、SCやSSWの校内のケース会議等への参加等、積極的な活用を図り、「チーム学校」の構築を行っている。 ③心・体面、発達面等の悩みを抱える児童及び保護者の心の安定を図るために、支援体制(特別支援教育、生徒指導対応)を構築し、運用していく。	①キャリアサポートを活用し、一人ひとりが目標を持って学校生活を送れるよう指導にあたる。 ②SC派遣(週1)では、カウンセリング後、ケースに応じて、情報共有を行い、指導や支援に活かす。SSWはケースに応じて、適時連携を取り、ケース会議等に参加し、専門的な視点で支援に活かしていく。 ③支援体制を可視化し、学年、特別支援部会、管理職間の円滑な連絡体制の確立、校内職員の共通理解を図り、関係機関との連絡や調整等を行う。	①児童アンケート2「目標をもって学習や行事に取り組んでいる」という質問への肯定的回答が80%をこえる。 ②教職員アンケート8「ケースに応じて、SC、SSWの活用ができていく」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ③教職員アンケート9「支援体制に沿った連携等により、校内職員の共通理解ができていくか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。	①児童アンケートの結果、「目標をもって学習や行事に取り組んでいる」に対する肯定的回答は90%と目標を達成することができた。 ②教職員アンケートで肯定的な回答が98%とあるように、カウンセリングを必要とする児童や保護者にとって、SCとの時間は有効活用できた。 ③今年度3名で仕事を回し、相談や教育支援にも対応してきた。次年度はこの人員で対応するだけでなく、今年以上に支援部の教職員が窓口となることも含めて連携を図っていく必要がある。 ④教職員アンケートで肯定的な回答が98%とあるように、特支Coが校内支援体制図で共通理解を図ったり、支援部の先生方も中心となって、学年の支援体制の共有や連携を取ったりすることができた。養護教諭、通級指導員、外部の相談機関とも連携しながら、様々な支援を必要とする児童への対応についても考えることができた。 (課題) ・対象となる事案があまりにも多く、一部の教員に負担がかかることも多く、人手不足が否めない。 ・全校児童1000人を超える学校で学級に個別の支援が必要な児童が多く、担任や教科担当を担いながら、特別支援Co.が校内の児童の実態を全て把握することは非常に難しい。 ・支援が必要な児童が多くなっている中、担任が一人でもれなく見ることは難しい状態である。特別支援教育支援員の先生を増やしてもらいように働きかけていく。	B	①児童が目標設定をより具体的にできるように、目標設定の際に具体的な例を挙げて記入できるように学校全体で統一していく。 ②SCやSSWの活用場面を具体的に示すことで、共通理解を図っていく。 ③今年度3名で仕事を回し、相談や教育支援にも対応してきた。次年度はこの人員で対応するだけでなく、今年以上に支援部の教職員が窓口となることも含めて連携を図っていく必要がある。	①自己評価はBだが、取組は十分評価できA評価だと考える。 ・SCやSSWとの連携も十分に行われているが、学校規模から考えると、複数日の配置等要望していく必要があると言える。 ・支援が必要な児童が増加する中で、組織として熱心に取り組まれていることは大変ありがたい。	

<p>特別支援教育の推進</p> <p>①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実</p>	<p>①特別支援学校センターの機能の活用を活かして、校内支援体制を通じて必要なアドバイス(コンサルテーション、巡回相談)を受けたり、実践講座を受けたりして、専門性を伸ばす。 ②児童一人一人の実態を把握し、適切な教育支援を行うことにより、児童の可能性を引き出し、確かな学力の向上と豊かな心の育成を図り、生きる力(自立)へとつなげる。</p>	<p>①校内支援体制における支援の中で、ケースに応じて、必要なアドバイスを希望、申請したり、実践講座を受けたりする。 ②児童の実態を掴むため、支援の必要な児童について情報共有する場を設定する。 ③個に応じた教育支援計画等を作成し、適切な対応を行う。</p>	<p>①教職員アンケート7「校内支援体制を通じて、ケースに応じて、必要なアドバイスを受けたり、実践講座を受けたりして、日々の教育実践に活かすことができているか」の質問に肯定的な回答が90%をこえる。 ②児童についての情報交換の場を毎月2回以上各クラスの実態や学級経営、支援の必要な児童の理解について交流する。(生活人権支援研修会) ③必要に応じてサポートファイルを作成し、学校と家庭が連携しながら、継続した支援を行う。(毎学期) ④支援員、担任と連携し、児童の実態に応じて支援体制を見直す。(毎月) ⑤必要に応じて、教育相談や巡回相談につなげる。</p>	<p>A</p>	<p>①教職員アンケートで肯定的な回答が100%となっているように、校内支援体制をもとにケースに応じて、必要なアドバイス(コンサルテーション、巡回相談)を受けたり、1年間を通して、1人1回は実践講座を受けたりして、専門性を伸ばしていくことができた。校内支援体制は前年度の課題を生かし、生活指導と連携し、児童の実態を元に組織的に対応した。 (課題)対象となる事業があまりにも多く、一部の教員に負担がかかることも多く、人手不足が否めない。 ②毎月の部会、生活人権支援研修会兼ひまわりこえ研修会、特支Co.が中心となって、必要に応じてサポートファイルを作成し、学校と家庭が連携しながら、継続した支援を推進することができた。特支Co.が中心となり、支援員と担任が連携できるように、児童の実態に応じて支援体制を見直し、必要に応じて教育相談や巡回相談につなげたりしてきた。 (課題)支援を必要としている児童の数に対して、支援の手が十分ではない。人員配置を要望する必要があると感じる。</p>	<p>①今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には、児童への支援や教職員への助言など、様々な場面で動いていただいた。教職員アンケートで「どのような場面でどのようなアドバイスを受けられることができるか共有できる機会がほしい」と意見があった。来年度はSSO・SSW・通級指導担当教員との連携の仕方や役割について共通理解を図り、より効果的な支援につなげていく。 ②学年間や校内全体で学習面、生活面等で児童が学びやすく、過ごしやすい環境づくりに向けて、今後も継続して、基礎的環境整備(UD化)等に取り組む。 また、担任が子どもの変化や小さなサインへの気づき、学年間での児童の実態把握、特別支援部会での情報共有し早急に対応できるように、支援が必要な児童を見るポイントを校内で確認する。</p>	<p>放課後デイなど事業所と学校での連携も頻繁に行われており、放課後の子どもたちの様子も安定しているそうである。今後も関係機関とつながり、個々の児童に合わせて柔軟に対応していきしてほしい。 ・支援する人員が不足しているため、早急な人員増加が必要。引き続き要望していきたい。 ・引き続き、教員間で情報を共有し、組織的に対応することが大切。 ・保幼小中、関係機関と連携し、継続した支援体制を築きたい。</p>
<p>教職員の資質向上</p> <p>①研修等の充実</p>	<p>①時代、課題に応じた研修を実施し、学校教育目標の具現化や個人個人の能力アップに努める。</p>	<p>①現状での自校の課題から精選した研修を実施する。</p>	<p>①教職員アンケート2「学校として子どもが主体的に学ぶ授業を実践している」の項目で肯定的な意見が95%をこえる。(昨年度100%) ①教職員アンケート12「学校として授業研究や研修等を通じて授業力の向上が図られている」の項目で肯定的な意見が95%をこえる。(昨年度100%) ①教職員アンケート13「子どもを取り巻く課題や必要とされる教師の資質・能力に即した校内研修を行っている」の項目で肯定的な意見が95%をこえる。(昨年度98%)</p>	<p>B</p>	<p>①教職員アンケート2、12において肯定的な回答が100%であった。 ①教職員アンケート13において肯定的な回答が96%であった。</p>	<p>①今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には、児童への支援や教職員への助言など、様々な場面で動いていただいた。教職員アンケートで「どのような場面でどのようなアドバイスを受けられることができるか共有できる機会がほしい」と意見があった。来年度はSSO・SSW・通級指導担当教員との連携の仕方や役割について共通理解を図り、より効果的な支援につなげていく。 ②今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には、児童への支援や教職員への助言など、様々な場面で動いていただいた。教職員アンケートで「どのような場面でどのようなアドバイスを受けられることができるか共有できる機会がほしい」と意見があった。来年度はSSO・SSW・通級指導担当教員との連携の仕方や役割について共通理解を図り、より効果的な支援につなげていく。</p>	<p>自己評価はBだが、アンケート結果から、各分掌の担当者と連携して研修の精選をすることができているので、引き続き情報交換しながら検討していく。</p>
<p>学校を支える組織体制の整備</p> <p>①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築</p>	<p>①学校運営協議会委員と学校の課題を共有する。 ②保護者、地域との温かい「横の連携」と保幼小中の「縦の連携」を強化し、教育環境の拡充を図る。</p>	<p>①学校運営協議会委員と教職員の合同研修会を開催し、学校運営に生かす。 ②保幼小中での取組を交流し、互いの教育の共通点を共有する。 ③九九学習や社会科・生活科の学習で地域に出かけたり、地域のひととの交流を行ったりする。</p>	<p>①「育てたい子ども像」「学校と地域の連携」について、教職員と学校運営協議会が話し合う研修会を1回以上開催する。 ②保幼小中教員の合同研修会を1回以上開催する。 ③九九学習や地域学習の成果を保護者や地域に発信する活動を行う。</p>	<p>B</p>	<p>①9月に学校運営協議会委員と教職員との合同研修会を行い、学テ分析と「育てたい子ども像」や「地域との連携」について話し合うことができた。 また、学校運営協議会に教員が参加し、意見を聞く機会をもつことができた。 ②夏季合同研修会を行い、教科等担当ごとに取組を共有することができた。 ③九九学習には約20名の地域の方に協力していただき、お礼の音楽会を開くなど交流できた。</p>	<p>①今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には、児童への支援や教職員への助言など、様々な場面で動いていただいた。教職員アンケートで「どのような場面でどのようなアドバイスを受けられることができるか共有できる機会がほしい」と意見があった。来年度はSSO・SSW・通級指導担当教員との連携の仕方や役割について共通理解を図り、より効果的な支援につなげていく。 ②今年度も通級指導の拠点校として、学校生活支援教員(通級指導)には、児童への支援や教職員への助言など、様々な場面で動いていただいた。教職員アンケートで「どのような場面でどのようなアドバイスを受けられることができるか共有できる機会がほしい」と意見があった。来年度はSSO・SSW・通級指導担当教員との連携の仕方や役割について共通理解を図り、より効果的な支援につなげていく。</p>	<p>自己評価はBであるが、アンケート結果から、各分掌の担当者と連携して研修の精選をすることができているので、引き続き情報交換しながら検討していく。</p>
<p>教育環境の整備・充実</p> <p>①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進</p>	<p>①緊急時に安全に素早く避難・対応できるよう備える。 ②日ごろから、教師の指示を静かに聞かせて適切に動く。 ③児童が安全に登校できるよう指導する。 ④児童が安全に学校生活を送ることができるよう安全を確認し、必要であれば修繕、改修する。 ⑤教育目標の実現、働きやすい環境づくりに向けて、教職員に働きかけられる。</p>	<p>①状況に応じて自分で判断できるよう学級・全体で指導する。 ②全校生が集まったときに話をしっかり聞き、素早く動くことができるよう指導する。 ③全職員で児童の登校を見守り、指導する。 ④定期的な安全点検を行い、迅速な対応をすとも安全な施設設備の使い方を適宜指導する。 ⑤全職員から吸い上げた意見をもとに、具体的な取り組みを提案する。 ⑥業務改善モデル校や市内の小学校の実践事例を参考にし、本校の業務の行い方を改善していく。 ⑦ICTの活用により業務の効率化や短縮を図る。</p>	<p>①②③つの訓練(火災、防犯、地震)を行い、それぞれの対応を学び速やかに、避難することができる力をつける。 ③毎月1回登下校指導を行う。 ④毎月安全点検を行う。 ④保護者アンケート13「学校は、学習の場として子どもが活用しやすい環境が整っている」の項目で肯定的な意見が90%をこえる。(昨年度92%) ⑤教職員アンケート19「学校は、業務改善に向けた取り組みを行っている」の項目で肯定的な意見が100%になる。(昨年度100%)</p>	<p>B</p>	<p>①5月に保護者同伴訓練を実施し、災害時等の対策に生かすことができるようになった。 ①年2回の避難訓練も運動場に安全に避難する訓練ができた。 ②2学期には、防犯訓練で警察の方と協力して実施し、全校児童に向けてお話をいただいた。 ②教員による校内研修では、不審者と判断したらすぐに110番や学校ホットラインを押すことの周知や校内での連絡体制の見直しなどを行うことができた。 ③登下校指導で右側通行や安全に気を付けた歩き方を指導した。 ④修繕が必要な箇所があったときには毎月の安全点検をもとに技能員を中心に速やかに改善にあたることができた。 ④保護者アンケート「学校は、学習の場として子どもが活用しやすい環境が整っている」の項目で肯定的な意見が89.5%だった。 ⑤教職員アンケート「学校は、業務改善に向けた取り組みを行っている」の項目で肯定的な意見が100%だった。だが、職員の帰る時間は相変わらず遅いという意見も見られた。 ⑤学期ごとに職員の意見を吸い上げ、校内で身近にできることから改善を図った。だが、業務自体が多様かつ複雑になっており、業務の減りは実感しない。 ⑤ゼロトラストの推進とともに、来年度から活用できるツールを、ICT支援員さんと検討作成中。</p>	<p>①来年度も今年度同様に、早い段階の保護者同伴訓練を行い、保護者との連携をしていく方向で考えている。教室での同伴訓練を行ったが、校内に居られないような災害時引き渡しのために数年に一度は運動場での引き渡しを行う必要がある。また、集団下校する児童の人数が多いので、非常時の時の訓練であることを保護者に強く伝えていく方向が必要である。 ①10月の防犯訓練では、本部と各教室間の連携をより進めていくと不安な児童が減ると考えている。また、校内研修は夏休みに行い、自分の担当を把握して早い段階から動けるようにしておく。 ②学校生活では、廊下を走る子が多いので、生活部と協力して対策を考える必要がある。また、給食担当と廊下の使い方の方向性を話し合い、普段から整頓された廊下にしていく。 ⑤業務改善モデル校や市内の小学校の実践事例を参考にしながら、具体的な業務改善策を打ち出していく。</p>	<p>・定期的な訓練や細やかな体制で取り組んでいる。自己評価はBであるが十分評価である。 ・下校時の歩き方が気になる。交通安全について重点的に取り組んでいきたい。 ・歩道や樹木、フェンスなど整備が進み大変よい環境になってきた。ありがたい。 ・昨年の評価を受けてぜひぶん働き方改革が進んできたようである。今後も市教委と連携しながら、働き方改革を進め、児童や職員の過ごしやすいや学校づくりを進めていってほしい。</p>

学校関係者評価総括

- ・学校の自己評価ではB評価が多いが、教職員自身が課題意識を持って日々の教育活動に取り組む姿勢が見られ、教育活動は概ね良好であるといえる。
- ・不登校や支援の必要な児童の増加など、多様な課題に組織的に対応している。しかし、世の中が変わってきており、人間関係が希薄であったり、捉え方も多様になっている。これまでと同じ取組では対応できなくなってきた。これまで以上に、関係機関等とも連携していかなければならない。
- ・生活リズムや睡眠の取組など、今後は、就学前とも連携しながら進めていきたい。
- ・登下校時の交通安全については、指導を続けていってほしい。
- ・これからの世の中を生き抜くためには、コミュニケーション力が必要。電子図書館の利用など、読書を勧め語彙力をつけさせていく。

次年度に向けた重点的な改善点

- ・初任者からベテランまで、教員それぞれのキャリアに応じた研修への参加を勧め、変化激しい世の中に柔軟に対応できる指導力をつけていく。また、学校や児童の実態に応じた講師を招聘し、学力向上や特別支援教育等の研修を進める。
- ・体験活動や地域と連携した学習を進め、それを発信することで子どもの自己肯定感を高めていく。
- ・不登校や支援を要する児童の増加については、市教育委員会に対して協力を求めるとともに、さらなる組織的な支援体制の構築を進めていく。
- ・生活リズムや姿勢・読書・運動習慣については、就学前施設とも連携し取り組んでいく。
- ・就学前施設や北中学校、北中学校ブロックの小学校との合同研修や、児童の交流などをさらに進める。
- ・「学校が楽しい」などアンケートの内容をより具体的にし、評価につなげたい。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った